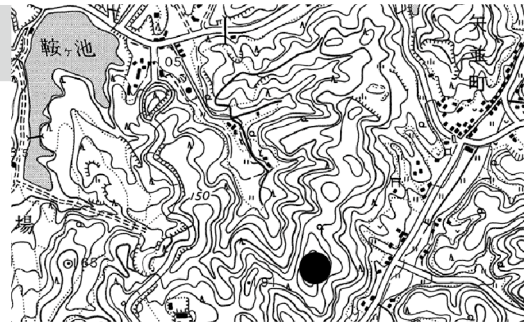


所在地	豊田市矢並町地内
調査理由	東海環状自動車道建設
調査期間	平成 13 年 6 月～9 月
調査面積	4,500 m ²
担当者	竹内 睦・池本正明・成瀬友弘



調査地点 (1/2.5 万「豊田北部」)

調査の経過 発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う事前調査で、国土交通省名四国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 12 年度に行われた範囲確認調査（面積 200 m²）の結果を元に調査区（面積 4500 m²）を設定し、平成 13 年 6 月から平成 13 年 9 月にかけて調査を行った。

遺跡の立地 矢並下本城跡は豊田市矢並町に所在する戦国時代の山城跡である。本遺跡は矢並集落の南西端にあたる矢並川右岸の南北に細長い山地頂部の標高約 190m に立地している。集落からの比高は約 90m で城の規模は南北約 130 m、東西約 40m を測る。

城の付近には、矢並川を挟んだ対岸に戦国期に豊田市北東部から足助・小原にかけての地域を領域とした鈴木氏の祖が紺屋を営んだとの伝承のある鈴木善阿弥屋敷が、北東約 1 km の矢並集落の北方山地頂部に矢並上本城跡が存在している。伝承によれば、「鈴木氏＝矢並殿ははじめ矢並を本拠としたことは明らかであり、矢並町の上・下の 2 城址は鈴木氏が築いたものであることは間違いない」（『豊田市史』）とあるが、この城の築城時期や存続期間など具体的な状況についての記録はほとんど残っていない。

調査の概要 調査の結果、城域の拡大を伴った大規模な改修が少なくとも一度は行われており、この改修を目処に前期・後期に分けて概観を見ていきたい。

前期の城は、主郭の南北を浅い堀切で遮断し、東側斜面に幅約 1 m 20 cm 深さ 20～80 cm の箱堀状の断面を有する横堀を南北に走らせている。この横堀は中央付近で土橋状に掘り残されており、ここから主郭上に上がったところで柵列跡と見られる柱穴列に食い違いが見られることから、虎口として利用されていたと推定される。この主郭上の柵列は径が 30 cm ほどのものと 15 cm ほどのものが規則的に並んでおり、北辺から東辺を通過して南辺へとコの字状に巡っていることが確認された。主郭上に柵列のない西辺では斜面上を南北に並行して走る幅 30 cm ほどの浅い溝が数条確認され、これらの溝から等間隔に並ぶ小さな穴が検出されていることから柵列を形成し、主郭上の柵列の空白を補っているものと推定される。

またこれ以外の遺構として主郭西側中央に位置する土壇がある。おおよそ 5 m 四方の規模で周囲より残存高で 30 cm ほど高くなっており地山と黄褐色土との版築により作られていることが確認された。土壇上には柱穴と思われる土坑もいくつか検出されたが明確に建物跡と呼べるような痕跡は確認することが出来なかった。

後期の城は北方を意識しての改修が行われており、城域は北に向かって拡大をしている。主郭の 50m ほど北で城の北端部にあたる部分に柵列を形成したと思われる浅い溝が東西に走り 1 m ほどの進入路に限定しておりここが城内への入り口と考えられる。ここから主郭方向に向かうと西斜面には下幅 1 m 20 cm ほどの箱堀状の断面を呈する縦堀が数条検

出され畝状竪堀を形成していることが確認された。一方、東斜面は切岸を施しており、切岸下の緩斜面には土塁状の高まりを2本検出している。これらは地山を掘り残して作ってあることが確認された。こうして進入路を限定した城内道を主郭に向かって進むと北堀切の手前で馬出状の曲輪にぶつかる。この曲輪の東側では堀切沿いに竪土塁を走らせている。主郭に入るとこの曲輪内を通り堀切に架かる土橋にたどり着くこととなる。土橋を挟んで東西に伸びる北堀切は下幅で約2m、主郭との比高約5m箱堀状の断面を有しており、両端は斜面へ竪堀として落としている。また、堀切は土橋の東側で北東方向に屈曲しており主郭の北東に付随する腰曲輪から土橋への横矢掛けを意識した構造になっている。土橋は馬出状の曲輪から60cmほど下がっており幅4mを測る。この土橋は地山を掘り残して作ってあり、土橋側面に前段階の堀切と思しき箱堀状の痕跡が見受けられ堀切が改修によって幅・深さとも拡張されていることが確認された。なお、土橋上面の状況を見ると東よりの幅70cmほどがほかの部分より荒れていることから初期の土橋がこの部分にあり土橋の上面が堀底であったとも考えられ、遺構が3時期に分けられる可能性もある。土橋から主郭に上るには主郭側の切岸に幅30～40cmほどのスロープが左上がりきってあることからこれを使用したものと思われる。

主郭は黄褐色土の盛り土により本来西から東へと傾斜している地形を西側にあわせて平坦にしており、東側では前期の遺構面から50cm以上かさ上げがされている。このかさ上げされた主郭上に北堀切に沿うかたちで北土塁が構築されている。土塁は幅約2m50cm残存高約40cmで、東側は主郭下の腰曲輪を経て竪土塁として斜面を下る。

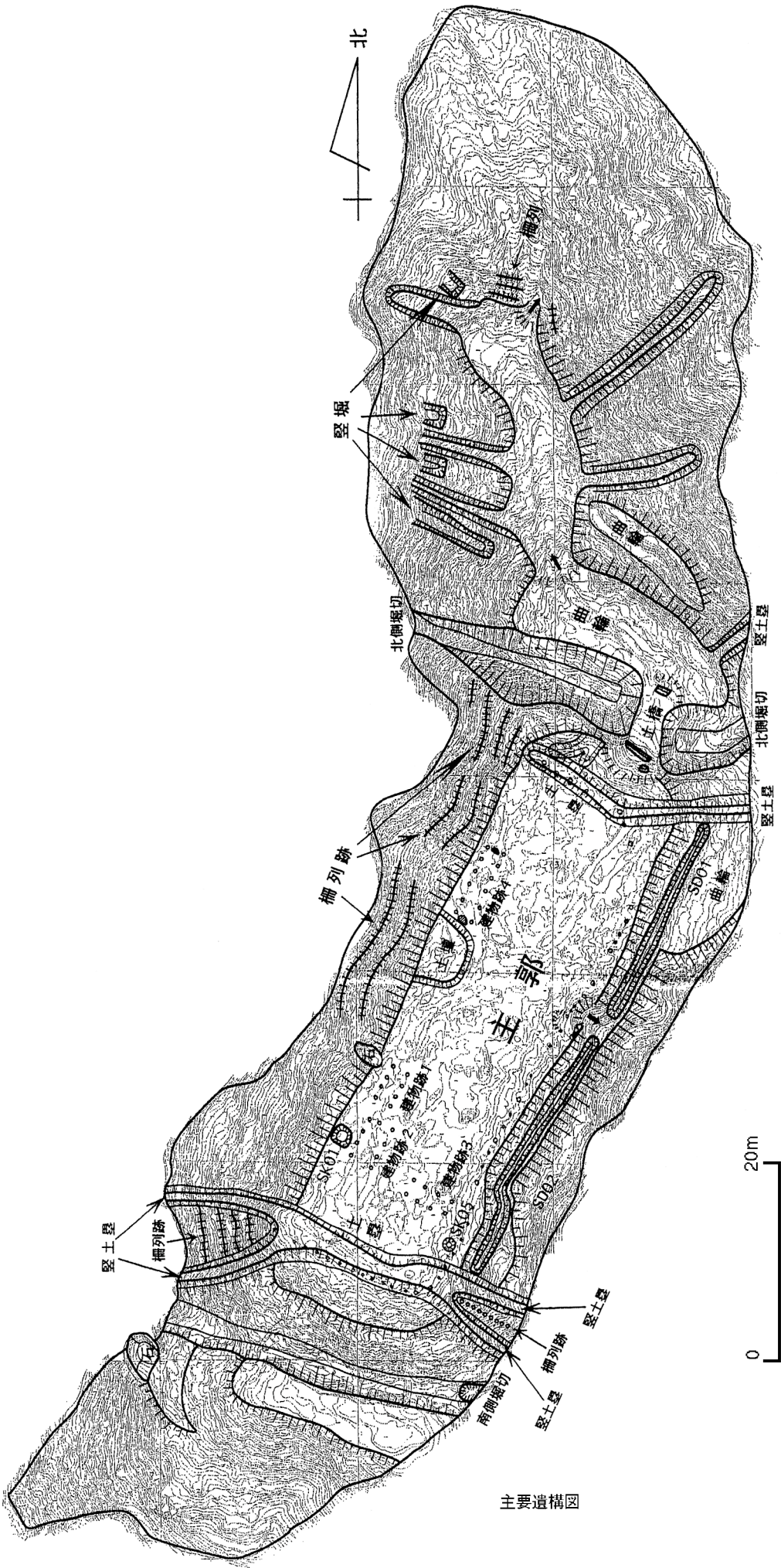
主郭内部には掘立柱建物が4棟確認された。このうち建物跡4は柱通りも悪く建物とするには疑問も残るが南側にカマドラしきものが検出されており、これに伴う簡素な小屋ではないかと考えている。建物跡1～3はL字形に並び、一連のものとして機能していたと考えられる。建物跡1と3については、方向は異なるもののほぼ同サイズで1間×3間(約2m70cm×5m40cm)であった。建物跡2は、1・3よりもやや大きく2間×3間(約3m60cm×約5m40cm)の規模を有することからこの城の中心となる建物と考えられる。

この他の遺構としてSK01が挙げられる西側斜面に面する形に作られておりその構造は小型の窯のようでもあるが遺物等決め手となる物はなく現段階での使用目的は不明である。建物跡2・3の南には南堀切に沿って南土塁が東西に走る。下幅約3m50cm残存高約50cmを測り、両端は枝分かれして、2本の竪土塁となって斜面を下る。東側の竪土塁の間からは柵列と思われる径15cmほどの柱穴が50cmほどの間隔で10個確認されている。

南堀切は下幅約3m50cmの箱堀状の断面を有するもので、北堀切と同じく改修の痕跡が認められる。しかし北堀切と違い堀切西端に大岩が横たわっていたため深くすることができず堀幅の拡大に重点を置いたものと考えられる。また同じ理由で東端は竪堀として斜面を下っているのに対し西端は竪堀の痕跡は確認できなかった。南堀切を越えるとまったくの自然地形となり人の手の加わった形跡はなかった。

以上遺構の概観を述べてきたが、遺物はおそらく前期段階に属すると思われる14世紀末～15世初頭ころの播鉢・内耳鍋を中心として土師器の皿や天目茶碗片などが出土しているが、改修時期や廃城の時期を特定できる遺物はほとんどなく多くの検討課題を残している。

ま と め 今回の調査では、城跡が後世の改変をほとんど受けていないこともあって戦国期の山城の状況を非常に良好な状態で確認することが出来た。県内における山城の発掘事例は少なく今回の遺構・遺物は貴重な資料となるものと思われる。(成瀬友弘)



主要遺構圖





主郭東側横堀



西斜面柵列跡



北堀切



建物跡 1



主郭柵列



主郭南東豎土塁



SK01



出土遺物